

～身近な石材 白谷石～

◇史料からみた白谷石

民家の塀や石蔵の材料として使われる凝灰岩ぎょうかいがんといえば大谷石が有名ですが、白谷石を使用しているお宅も多いはず。市内の北塩子と上小瀬にまたがる白谷峠やその周辺は、かつて白谷石を採掘していた場所として知られ、現在も各所に露頭をみることができます。



▲白谷石の露頭（北塩子）

白谷石は、1730万年前後の火山活動で噴出した火山灰が堆積したものと考えられ、栃木県から産出する大谷石と同質の凝灰岩です。市内にはこの凝灰岩の層が、諸沢から那賀にかけて広がっていて、久慈川をはさんで東が大沢口凝灰岩部層、西が小貝野層と呼ばれています。どちらも同じ地層です。凝灰岩の特徴は、加工がしやすく採掘が容易であること、耐火性、吸水性に優れていることです。一方で、耐久性には乏しいといわれています。

この白谷石、いつ採掘が始まったのでしょうか。

明治43年の『茨城県産業要覧』所収の「茨城県産業地図」には、当時すでに著名であった稲田石や真壁石（笠間市、桜川市産の御影石）、寒水石（常陸太田市真弓山産の大理石）の表記はあるものの、白谷石の表記はありません。続いて、明治44年の『塩田村郷土誌』にも白谷峠（白岩峠）は名勝として紹介され、産物としての記載はありません。

それから約10年を経た大正12年、白谷石は売買される石材として『那珂郡郷土史』に初めて紹介されます。ここでは、安価な割に耐久力があり、近年各地に需要があると記されています。

その後、昭和10～12年の「塩田村事蹟簿」では凝灰岩の産出量が判明します。産出量は16,340才（才は石材の容積の単位。1才は27,800cm³）、産出額は2,400円から2,450円、1才あたりの単価は15銭で、3年間を通して横ばいです。残念ながら「塩田村事蹟簿」はこの1冊しか残されていないため、他の年代の白谷石の産出量を知ることできません。白谷石の採掘の開始期は、大正期以後といえそうです。

かつて白谷石の採掘に携わった東谷家とうたけには、白谷石で造られた未完成の石蔵があります。この石蔵は、大正12年の関東大震災にも被害がなかったと伝えられていて、建造が始まったのはそれ以前ということです。この石蔵の建造中に、一族に不運が重なったため、屋根を作れば完成、というところまで進んでいたにもかかわらず中止されたそうです。



◀東谷家の石蔵（北塩子）

◇戦時中の採掘

その後、白谷石は戦中にかけて北塩子、西塩子、長沢地区の各所から採掘され、徴用で集められた地元の人々が採掘に従事しました。白谷峠から玉川村駅までトロッコの軌道が敷かれていたことを、多くの地元の方が覚えていますが。戦争末期の昭和20年7月頃には日本軍の部隊がやってきて、白谷峠に地下壕を掘っていたといわれています。間もなく終戦を迎え、部隊は直ちに撤収し、採掘坑はそのままになったようです。

北町の倉田家には、市内で唯一の防空壕が現存します。白谷石を使用して地元の石工が造ったものです。産地が近かったため、物資不足の当時においても入手しやすかったのでしょう。12畳ほどの広さがある防空壕は、東日本大震災に見舞われるまでは崩れることはありませんでした。



▲白谷石造りの防空壕（北町・倉田家）

白谷石の産出は、終戦の頃までに終了したといわれています。これには関東大震災からの復旧に伴い、都市部でコンクリートが普及し需要を伸ばしていったことも原因のひとつにあるようです。

東谷稔さん、坏文也さんに聞き取り調査に御協力をいただきました。『常陸大宮の地下資源』（常陸大宮市歴史民俗資料館、2013年発行）を参考にしました。

文書館 ☎52-0571